

地域の資源や素材を見直し、新しい地域の産業おこしに取り組む動きが広がっている。米沢市にある、縫製会社「株式会社第一ほうせい」が着目したのは、県内産のフルーツと地元の伝統的な米沢織。これらを掛け合わせた新しい製品が誕生している。

株式会社第一ほうせいは、山形県米沢市の上杉公園から歩いて5分ほどの、四季の移り変わりが感じられる環境の良い場所にある。前身は米沢織の卸商の河内屋商店で明治23年に創業し、現在の第一ほうせいは河内屋商店の縫製部として昭和35年に独立した。当時、今では懐かしい綿入れ丹前や着物の上に羽織る道行コートなどを生産し、その多くは東京で販売されていた。昭和62年から平成元年頃にかけて開発した、ミシン使用のハイテク着物のオーダー仕立ては、現在も好評を得ている。また、地元米沢の商品開発にも力を注ぎ、素材から完成品まで一貫作業を行っている。そのためお客様がお急ぎの時には、お受けしたその日に着物を完成させている。

## ヒントは新幹線のなかで

雪国の私たちにとって、春に咲く桜、桃、梨、りんごなど果物の花は何とも言えない感激がある。ある年の4月、東京から帰る新幹線の車窓には美しい



上品に輝くサクランボ染めの織物

## 県産フルーツ 新しい地域

桜前線が描かれていた。その途中、福島から米沢に向かう車中のスーパーテロップに「これからつばさ号はフルーツ王国山形へ」と案内が表示された。その時「さくらんぼと紅花、栗、杏、柿など、フルーツ王国山形にふさわしい、フルーツ染めが出来ないだろうか」と思い浮かんだ。

山形の代表的なフルーツと言えば、さくらんぼとラ・フランス。特にさくらんぼは、全国の収穫量の70%を超える代表的なフルーツであることから、さっそくさくらんぼ染めに取り組むことにした。トルコ共和国が原産地のさくらんぼは、明治初頭に日本で初めて西洋果実として植えられたと言われている。さくらんぼは実を成長させるため冬にせん定され、さくらんぼ染めはその枝を使うことにした。そこで、まずせん定された枝を集めることになったが、初めの年はすでにせん定の時期が終わってしまっていた。しかし農家の方にご協力をいただき、枝を手に入れることができた。

## 試行錯誤を重ねて

さくらんぼ染めは、さくらんぼの枝と樹皮をこまかく小さく切って煮出し何度も何度も染色する。糸と染料を結びつけるには媒染剤を使い、アルミ媒染はサーモンピンク系、鉄媒染はグレーピンク系、スズ媒染ならばクリーム系のピンクに染まる。



株式会社第一ほうせい 代表取締役社長

**鈴木 陽市** (すずき・よういち)

1949年、山形県米沢市生まれ。  
タキヒョウ被服株式会社（名古屋市）を経て、1972年  
に株式会社第一ほうせいに入社、1989年より代表取締  
役社長。

〒992-0045 米沢市中央二丁目5番50号

TEL 0238-22-8221・FAX 0238-22-8222

E-mail dhsuzuki@ms3.omn.ne.jp

URL <http://www3.omn.ne.jp/~housei>

## ×米沢織で 産業おこし

織物をはじめに経糸と緯糸を染めてから織ることから、やり直しがきかない。そのため、糸の染め上がりには神経を使い念入りに色合わせをした。

さくらんぼの花言葉は「上品」、染め上がって乾燥した織物もその花言葉通りに上品に輝いていた。さくらんぼの「桜桃」は「美人」とも言われている。美人で上品な色に染め上がった織物をどのように生かすか、次の課題にむけて検討を始めた。

織物で表現する技法は沢山あるが、たて縞と格子、かすりそして花織と透かし織を中心に、まず「おしゃれ紬きもの」と「袋帯」と「名古屋帯」を製作することにした。それらを製作してくださるのは、置賜地方の伝統織物工場さんたちであり、それぞれ伝統の技と特徴を持っている。仕上がった着物や帯は期待以上の素晴らしいものとなった。

山形の四季は素晴らしい美しさがある。「自然の美しさがあふれる山形県の四季を表現する」を全体テーマとし、さくらんぼ染めを応用し、次なるフルーツ染めの製品づくりにチャレンジを始めた。

冬が終り小川の隙間から、ふきのとうが顔をのぞかせると待ちに待った春が訪れる。春のイメージは若草のグリーンに桜や桜桃、リンゴの花びらがそっと花吹雪となっておちている表現にした。そして、「ルビー色の小さな宝石、小さな恋人」といわれる真っ赤なさくらんぼが実る初夏には、チェリー色をベースに太陽のまぶしい光のまっすぐな線をしま柄

に表現した織物を作成した。また、黄色に染まった紅花がいっせいに咲く夏には、紅花の赤と黄色、それにさくらんぼのピンク色が仲良く緯の霞ぼかし色の織物ができあがった。

### 四季の味わいを織物で表現

秋になるとたくさんの果物がそろそろ。収穫の真っ盛り、稲は黄金色に輝き、りんごは真赤に微笑み、柿はオレンジの柿色になる。色の三原色を混ぜると黒に近づく。すべての色が入っている墨色は秋を表現するにはピッタリで墨色の着物や帯にはすべての色が似合う。

冬、人々は雪の厳しさに耐えた暮らしのなかで、時折黄色い太陽が真っ青な空に顔を出す。新雪が銀色に輝き舞う景色は、雪国の人にとって冬の宝物である。その景色をイメージして白とさくらんぼのグレーピンク、そして墨色で表現した織物も出来た。

はじめは「県の代表的なフルーツであるさくらんぼ染の織物をつくりたい」という安易な気持ちだったが、製作をすすめていく中で「特産物を生かし日本人の衣服である着物に、山形の美しい自然を表現できれば」という気持ちがわいてきた。現在はさくらんぼ、紅花、藍、栗などが中心だが、今後はいろいろな果物との組み合わせや、環境に少しでもやさしい染色を、産地の方々と一緒に工夫して考えていきたい。そして、この織物が日本の美しい心、さくらんぼのように上品な心を持つ人々に伝われば、さらなる喜びである。